

松陰の思想過程を四期に区分し、
各時期における九つの思想的トピック
(士道、忠誠、生死観、学問観、対外観、国体観、幕府観、政治思想、尊王攘夷論) に沿って、
松陰思想の〈等身大の実像〉に迫った力作！

本山幸彦 著

吉田松陰の思想

—— 尊王攘夷への思想的道程 ——

● A5判・上製・256頁

● 定価＝本体価格2、500円＋税

● 2010年4月刊行

ISBN978-4-8350-5159-8

● 推薦＝辻本雅史〈京都大学大学院教育学研究科・教授〉

不二出版

松陰思想の〈等身大の実像〉に迫る労作！

辻本雅史 京都大学大学院教育学研究科・教授

私は、かつて本山幸彦先生が京都大学で開講されていた授業のすべてを、数年間受講したことがある。その時の私の一番の楽しみは、教育学部の授業ではなく、法学部兼担の「日本政治思想史」であった。単位にもならないのに、毎年、毎回、一言も聞き逃すまいと集中し、身を乗り出して聴講していた。

本山先生の思想史は、思想著作に愚直なまでに向き合い、そのテキストを思想主体に即して内在的に徹底的に読みぬくことに裏打ちされている。テキストに即して厳密に解釈された先生の思想理解は、鋭くかつ精緻であった。まるで思想家自身が、先生の口を借りて語っているかのような迫力があつた。

なかでも後期水戸学、佐久間象山、横井小楠、それに吉田松陰、この幕末の思想は、とくに力が入っていた。維新変革のドラマを思想史の方法で描く上にこの一人も欠かせない、それが思想史研究者としての先生の確信であった。後期水戸学については『明治思想の形成』（一九六九、福村出版）と『江戸の思想家たち』（一九七九、研究社）に書かれ、佐久間象山と横井小楠については前著『近世儒者の思想挑戦』（二〇〇六、思文閣出版）で精緻に考察されている。松陰の思想を改めて書き下ろすことは、先生の幕末思想史研究の必然であつた。

これまで松陰に関する論著は少なくない。しかしその大半が松陰を憧憬する賛美論か、松陰に託した執筆者の自己主張かであり、松陰思想の実像は必ずしも明確ではない、本山先生はそう考えられ、松陰をして松陰思想を語らしめるべく、本書を著された。松陰著作の引用が多用されているのは、そのためである。松陰の思想過程を四期に区分し、各時期における九の思想的トピック（士道、忠、対外観、国体観、尊王攘夷等）に沿って、松陰思想の〈等身大の実像〉をおのずから浮かび上がらせる構成になっている。まるで本山先生が、生ける松陰に直接インタビューしてきて、それを整理しまとめ上げたような、そんなリアリティを本書は感じさせる。迫力ある一冊であり、先生の往時の思想史の授業に再会したような、新たな喜びを禁じえない。

序論

第一章 時期区分

第一期

第二期

第三期

第四期

第二章 内面的価値観形成の思想

(一) 士、士道

(二) 忠、忠誠

(三) 死に対する観念

(四) 学問と学問観

第三章 政治課題解決のための思想

(一) 対外観

(二) 国体観

(三) 幕府観

(四) 政治思想

第四章 尊王攘夷

「むすび」にかえて——実像への接近
索引

序論

はじめに吉田松陰の思想を書くにいたった動機について話しておこう。動機は三つある。一つは前回の拙著『近世儒者の思想挑戦』（思文閣出版、二〇〇六年）の幕藩体制の崩壊期（佐久間象山、横井小楠を論じた箇所）で取り上げるべきであった吉田松陰を、彼は儒者ではないという理由で書かなかつたことに対する反省である。松陰の思想は幕末の思想としては、誰がみても本来不可欠の思想だといわねばならない。にもかかわらず、前著では松陰を書かなかつた。理由はきわめて形式的なものであつた。日がたつにつれて私は後悔した。

本来、前著において幕末の卓越した三人の思想家を取り上げるべきであつた。「東洋道德、西洋芸術」を唱えて、儒教倫理によって日本人の主体性を確立し、西洋の宗教や精神文化の誘惑に負けない日本人をつくつた後に、西洋の物質文明、自然科学の導入を図つた佐久間象山。儒教の理念を極限まで拡大することによって、東洋の道徳理念と西洋の道徳理念との結合を実現し、戦国的な世界各国の割拠主義を否定して世界主義を主張し、通商交易は「天地間固有の定理」と称し、世界各国とともに、日本の繁栄を図つた横井小楠。

それにもう一人。尊王攘夷（尊皇攘夷という文字を松陰は使わない）を唱えて全国民のナショナリズムを喚起し、天皇の下に鞏固な国民の統一を実現し、日本の独立と国権拡張を勝ちとろうとした吉田松陰。以上の三人である。一人欠けても幕末、明治初期の主体的な変革思想の全貌は把握できないのである。とくに松陰は「日本近代化の

成田龍一 著

加藤時次郎

堺利彦・幸徳秋水等の明治社会主義者の一員として「社会改造」をめざし、実費診療所、平民病院を創立するなど独自の道を歩んだ医師・加藤時次郎（一八五八—一九三〇）の生涯を描く。

● 四六判・上製・352頁・定価1,800円／
'83年9月刊

吉田曠二 著

わが生涯の新島襄——森中章光先生日記

新島研究の第一人者＝森中章光は、至誠の人であり、生涯を賭け新島襄のメッセージを探求し続けた人である。本書は、新島思想のすぐれた伝道者としてのこの世に生まれて来た森中章光の生涯を再現する。

● 四六判・上製・294頁・定価2,000円／
'91年5月刊

室田保夫 著

留岡幸助の研究

近代日本における代表的な社会事業家・留岡幸助の前半生——岡山高粱での少年時代から、牧師・北海道バンド・米国留学・教誨師を経て家庭学校の創設、「人道」の発行まで——をあとづけた力作。

● A5判・上製・函入・552頁・定価9,500円／'98年10月刊

荻野富士夫 著

初期社会主義思想論

本書は、日本社会主義史の初期の群像——赤羽巖穴、高山樗陰、正岡芸陽、山縣悌三郎、安部磯雄、石川木、土岐哀果、山本銅山、河上肇、大杉栄、荒畑寒村、堺利彦——等の思想と行動を検証する。

● A5判・上製・函入・720頁・定価8,500円／'93年10月刊

姜克實 著

浮田和民の思想史的研究——倫理的帝国主義の形成

本書は、明治・大正期に活躍した浮田和民の思想史的研究、「倫理的帝国主義論」の形成史研究に重点を置き、浮田の周辺人物、関連事項にも触れている。

● A5判・上製・560頁・定価6,000円／
'03年12月刊

二井仁美 著

留岡幸助と家庭学校——近代日本感化教育史序説

一八九九年に家庭学校を設立した留岡幸助の思想を、彼の二〇〇に及ぶ欧米の施設視察をあとづけながら明らかにし、東京・北海道・茅ヶ崎・小笠原諸島に展開した家庭学校の教育の具体像に迫る。

● A5判・上製・約330頁・定価5,000円／
'10年2月刊

● 表示価格はすべて税別

不二出版

〒113・00023

東京都文京区向丘1・2・12

電話▼03・3812・4433

FAX▼03・3812・4464

振替▼001602・94084

2010/4